

## ▶ テルの死を日本に伝えた由比忠之進

長谷川テルは中国の東北、佳木斯(ジャムス)で、1947年に亡くなりました。しかし、テルが死んだということは日本のエスペラント仲間では誰も知る人はいませんでした。中国では、共産党と国民党との熾烈な戦い、いわゆる国共内戦が勃発し、日本国内では、敗戦後の焼け跡闇市の時代です。

テルの死を日本の仲間に知らせたのは当時、“満洲”にいた由比忠之進というエスペランティストでした。由比忠之進という名前を聞いて、すぐに思い出す人はもう少ないでしょう。しかし、70歳以上の人たちで、ベトナム戦争に関心があった人なら、憶えている人がいるかもしれません。

## ▶ 世界に広がったベトナム戦争反対の声

1960年代半ば、アメリカは社会主義の北ベトナム、正式にはベトナム民主共和国に対してナパーム弾などの最新兵器を使い、また大量の兵士を動員して攻撃していました。当時、ベトナムは南北に分かれており、南はアメリカの傀儡政権でした。北は革命家であるホー・チミンが率いる国で、南にはベトナム解放戦線が活躍していました。

大国アメリカがアジアの小国ベトナムを激しく爆撃していたベトナム戦争は大きな影響を世界に与えていました。心ある人たち、とりわけ正義感の強い世界の多くの若者たちは、ベトナム戦争を止めさせるためにデモ行進などをして反戦活動を展開していました。日本では今は亡き小田実を先頭に、鶴見俊輔らの知識人たちによって「ベトナムに平和を！ 市民連合」(略称：ベ平連)が結成され、反戦活動が果敢に展開されました。日本だけではなく、ベトナム反戦活動はヨーロッパからアメリカまで全世界的な広がりをもっていました。

私は1968年夏、ブルガリアのソフィアで開かれた世界青年平和友好祭に、今は亡き伊東三郎(岩波新書刊『エスペラントの父 ザメンホフ』の著者)の誘いに乗って、訪欧の途次ということで参加しましたが、その大会に参加していた西ドイツの新左翼グループ、社会主義ドイツ学生連盟(SDS)の青年たちは、ルディ・ドゥチュケを指導者として仰ぎ、アメリカへの抗議集会で、「ホー・チミン！ ホー・チミン！」と、闘うベトナムの指導者の名前をシュプレーヒコールし、アメリカ政府への抗議の声を挙げました。そんな若者たちと知り合ったことも昨日のように思い出されます。まさに、目の当たりに、ヨーロッパの若者たちのベトナム戦争反対運動の熱気を知りました。

また、キューバ革命を指導したチェ・ゲバラは「第二第三のベトナムを創れ」と、ベトナム戦争を契機に世界革命の展望を望み、世界の若者たちに強いアピールを発信していました。

## ▶ 官邸前で焼身自殺して抗議

しかし、日本の当時の佐藤栄作政権は、アメリカ政府に追随し、沖縄を始めとするアメリカの軍事基地はベトナムへ出撃する米軍を背後から支えていました。多くの市民の反対にもかかわらず、枯葉剤などを投入してベトナムを攻撃するアメリカ政府を支持する佐藤首相は1967年11月12日、訪米しようとしていました。

その前日の11日、佐藤首相への政治姿勢に抗議するために、首相官邸前で焼身自殺をしたのが由比忠之進だったのです。

その頃、ベトナムでは仏教徒である僧侶の何人がアメリカに追随する南ベトナム政権とアメリカ政府に抗議するために、焼身自殺をしたことがありました。当時の南ベトナム政府の大統領夫人は、「人間バーベキュー」と言って焼身自殺を揶揄しました。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」  
第十二回 焼身自殺で佐藤栄作政権に抗議した由比忠之

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

由比忠之進が焼身自殺をしたことに日本の人々は驚き、マスコミでも大きく報道されました。由比は、佐藤首相への抗議の遺書をもっていました。

「私ごとき一介の庶民が何を訴えたとして何の効果も期待できないことは百も承知でいながら、も早がまんでできなくなった」

と焼身自殺する気持ちを記しています。朝日新聞は、「どこへ、だれに訴えていいかわからないで、悩みぬいた末の覚悟の行動」と由比の行動を報じました。

### ▶ 若い頃からエスperantoを学ぶ

由比は1894(明治27)年、福岡県前原(現在の糸島市)で生まれ、忠之進と名付けられました。父親が「国に忠義を尽くす人になるように」という思いがあったのでしょう。生まれた年は、日清戦争(中国では甲午戦争という)が始まった年でした。由比はしかし、父の期待に背を向けて夜逃げのようにして上京し、苦勞しながら東京高等工業学校、当時、蔵前高等工業と呼ばれていた学校に入学しました。現在の東京工業大学の前身です。

時代は大正デモクラシーの高揚期です。エスperantoも盛んに学ばれていた時代でした。由比は、新しい思潮の一つであったエスperantoを学び、平和と人類愛の思想に共感しました。

学校を卒業後由比は木工場を経営しますが失敗し、どん底の生活を味わいますが、親戚の紹介で名古屋中央放送局、現在のNHK名古屋放送局に電気技師として就職し、まもなく、“満洲”の紡績会社に乞われて電気技師として中国東北に渡りました。平和を愛し、人類愛に目覚めているエスperantonティストの由比忠之進は、五族協和と表向き言いながら、現実に満洲で目にした日本人の横暴さ、中国人に対する差別に対して会社に待遇改善を求め、技術者の中では最も進歩的でした。しかし、それが逆に会社に疎んじられ、電気技師とは関係のない北満の農業経営に左遷されました。

### ▶ 日本敗戦後、中国残留を望む

日本の敗戦は、日本人と中国人の関係を逆転させました。多くの日本人は相次いで中国を引揚げ、日本に帰国しました。しかし由比は、日本人が犯してきた罪

の一部分でも償うことができればと思っていました。

当時、大連にいた残留日本人たちのリーダーだった石堂清倫は『わが異端の昭和史』で「(由比は)中国の新しい経済建設に参加することは日本人の歴史的任務であるから、妻子は一足さきに帰国させ、単身北満に出かけると言いだした。骨はそこに埋める覚悟であった。彼の意気は大いに壮とするが、夫人とともに出かけなさい。それができなければ大連に残るように勧めたけれども振りきるように北へ行った」と記しています。

由比は破壊された紡績工場を再建すべく、家族たちを日本に帰国させ、自分ひとりが中国に残ることを決めました。

中国に残った由比は、いつも胸のところに緑のバッジをつけていました。そのバッジはエスperantonティストであることを示すものでした。このバッジをつけていれば、いつか中国人エスperantonティストに出会うことがあるだろうと思っていたのです。

1947年2月、由比は紡績管理局の敷地調査でハルピン、牡丹江、佳木斯などを回っていました。そして牡丹江の紡績工場で休んでいる時、デスクの上にエスperantoの本を広げて読んでいたところ、ある中国人が「あなたはエスperantonティストですか」と日本語で声をかけ、「長谷川照子を知っていますか」と訊いてきました。由比は、照子ことテルの存在を知りませんでした。

由比は仕事の関係で満鉄調査部にいた石堂清倫らとも付き合いがありましたが、石堂からもテルの名前を聞いたことがなかったようです。石堂は東大の新人会出身でエスperanto運動にも参加しており、テルの反戦放送も当然知っていたはずですが、仕事上、誰にもそのことを話さなかったのでしょうか。

由比に声をかけてきた中国人とは、テルの夫の弟である劉介庸でした。

(本稿は比嘉康文著『我が身は炎となりて一佐藤首相に焼身抗議した由比忠之進とその時代』新星出版刊、石堂清倫著『わが異端の昭和史』勁草書房刊を参考にしました)